

〔書評と紹介〕

長谷川成一編

『北奥地域史の新地平』

千葉 一大

I

長谷川成一氏編による『北奥地域史の新地平』が、二〇一四年三月に刊行された。

日本史の学界において、一九八〇年代以降、「北からの日本史」を掲げ、北方史・北奥地域史はもとより、近世国家史研究にも中心的な役割を果たした一人である長谷川氏の存在は非常に大きい。国家史や幕藩関係、弘前藩政史研究といった本貫のみにとどまらず、最近は災害史や環境史にまで研究の視野を広げ活動を続けていることは、氏の史的興味関心の広さを示すものであるし、後進にとっては大変刺激的である。

また、そのエネルギーシユな牽引力についても、氏を知る人なら誰もが認めるところであろう。弘前大学國史研究会会長として円滑かつ安定した運営に努められ、発展させてきたことも勿論だが、現在進行中の『青森県史』をはじめ、『本荘市史』、『五所川原市史』、『新編弘前市史』、『新青森市史』といった、氏が編纂の中心となって生み出された評価の高い地方史誌類も、そのような卓越した活動によって編纂の体制が築かれ、生み出されたものだといってよいだろう。

長谷川氏はまた、弘前大学での教育活動だけではなく、論文の閲読、地方史誌の編纂作業などを通じても研究者の育成、後進の指導に積極的であった。氏の若々しさは、若者たちとそのような形で日々接してきた故であろうか。

そのような長谷川氏であるが、二〇一四年三月末を以て長年にわたって教鞭をとられた弘前大学を定年退官された。それに合わせて、氏の教子でもある浅倉有子・本田伸両氏のよびかけにより、長谷川氏を編者とし、氏が弘前大学において直接薫陶した十人の執筆者を擁するこの論集が編まれた。執筆者は何れも地域史研究の第一線に立つ人々である。学問の師に対する教え子たちからの謝恩という意味も込められたこの論集の内容について紹介し、読者の参考に供することとしたい。

II

本書は、第I部「藩政の展開と北奥地域」・第II部「北奥地域の転換と民衆」とからなり、第I部四篇、第II部六篇の論文によってなる。I部が江戸時代前期から中期にかけて、II部は同じく後期から幕末・維新にかけて、各論文の取り上げた時代によって配列がなされたように思われるのだが、時代的に前後したり、内容が時代にまたがっていたりする論文もある。内容を加味した配置を各部で行っていると見受けられる。論文集という性格上、相互が独立した論文となっているので、以降は第I部・第II部それぞれに配置された各個別論文ごとに内容を紹介する。

第I部には、市毛幹幸・本田伸・小石川透・石山晃子各氏の論文が配

されている。

市毛論文「十七世紀後半の日本北辺情報を伝える古地図について―『津軽一統志』巻第一〇収載「松前之図」をめぐって―」は、寛文蝦夷蜂起（寛文九年、一六六九）を検討する上で基礎史料となる『津軽一統志』巻第十所収の「松前之図」を検討対象とする。市毛氏は絵図内容の記載情報を読み込み、同書中に記された蜂起時に弘前藩が収集した蝦夷地の松前・上下蝦夷地の集落名、地形、行程、交通情報とを比較するという丹念な作業を行っている。その結果として、それらの地理的な情報に即してこの絵図が作成されたものではないことを明らかにしている。

幕府から現地派兵を命ぜられた弘前藩が収集・蓄積した蝦夷地情報は恐らく相当な量に及び、それらが官撰史書『津軽一統志』編纂に際して整理されたと思われるが、その過程でなされたはずの掲載情報の選択では、何が残され、何が捨てられたのかということを考える必要があるだろう。弘前藩の収集した情報が余り反映されていないこの絵図が、蝦夷地派兵を藩の歴史に位置づけようとする官撰史書になぜ掲載されたのか、市毛氏の試みは、藩の修史事業と情報選択という側面からも、今後の研究に興味深い視点を与えるものとなっている。

本田氏は国絵図研究のエキスパートとして学界でもよく知られた研究者であり、これまでも複数の論文で、国絵図やその関連史料を用いて藩境争論の検討を行っている。今回の論文「近世北奥の藩領域―南部・津軽境と「烏帽子山争論」の発生―」では、それらに引き続き国絵図関係史料を用いて、津軽領と南部領の境界争論「烏帽子山争論」について、その発生と展開を論じている。

「烏帽子山争論」は正徳年間（一七一―一六）のものが有名であるが、そもそもこの紛争の起こりは、元禄国絵図作成の際、国絵図の作成を担った弘前・盛岡両藩の間で境論が発生したことに端を発している。本田氏は主に弘前藩側の史料を丹念に読み解いて国絵図作成の過程を明らかにし、境目をめぐって両藩が対立、争論に発展し、やがて収束していく過程を描き出す。そして、改めてこの境論が、津軽為信の独立以来、南部・津軽間に生じた相互不信・対立感情が要素として大きな位置を占めていることが明らかにされる。

国絵図作成をめぐる両者間の交渉を知るには、盛岡藩側にも関係史料が豊富に残されており、それらの分析を通じて盛岡藩側の論理や事態の展開についても明快にできると思われる。本田氏によってさらに境論の詳細な分析が行われることを期待し、成果を俟ちたいと思う。

小石川氏は、すでに地元紙『陸奥新報』の長期連載企画「北方史の中の津軽」（陸奥新報ウェブ版に掲載。 <http://www.nutusinpo.co.jp/index.php?cat=20>）において閲覧された）でたびたび弘前城の普請について取り上げており、読者においても目にされたことが多いと思う。また本稿と関連する論文としてすでに「江戸時代の城郭統制と弘前城」『津軽学』六、二〇一二年）を発表している。

今回の論文「弘前藩における城郭修補申請の基礎的考察」では、武家諸法度の規定により幕府への申請が義務付けられていた城郭修補申請について、弘前城における状況を「弘前藩庁日記」等から丹念に掘り起こし検討を加えている。

日本城郭史は、城郭建築や築城・普請の技術等に関する分析が多くな

されてきたが、早くから大名統制・城郭統制という政治史の観点からの検討も看過されずに行われてきた。小石川氏は、申請の経過についてのこれまでの研究成果と弘前城の場合とを比較、享保年間に幕府の城郭修補申請様式の整備が進められていくのに合わせて、申請書類の事前内見を幕府関係者に行わせるなどの変化が生じたこと、また城郭修補の申請基準に適合するかどうかを、収集した他藩の事例、幕府関係者への問い合わせなどを通じて藩内で慎重に判断する事例が多く見出されたことを報告している。

氏の論文・新聞記事等の充実した内容は、弘前市の文化財職員として弘前城を担当し、関係史料を深く知りうる立場である筆者にして初めて成し得たものといえるのではないだろうか。

石山論文「近世南部領における造船技術力と廻船海運」では、近世の北奥の流通において廻船が重要な役割を果たしてきたにも拘わらず、これまで論じられてこなかった視点、すなわち流通に用いられた廻船の造船について分析を試みた論文である。石山氏は既に「近世津軽領における廻船建造システムと地域社会」(『弘前大学國史研究』一三二、二〇一二年)で津軽領における廻船建造について論じているが、今回の論文では盛岡・八戸両藩領における廻船建造の実像に迫った。

その結果、八戸領においては、当所から領内に廻船建造を受注しうる船大工が存在せず、廻船を造船する際には盛岡藩領の大槌・宮古・安渡・野辺地、仙台藩領石巻、江戸、大坂などの船大工が参入する状況であった。八戸湊は廻船の中継地であり、したがって廻船に関する造船技術も有するであろうという印象を持っていた筆者にとっては意外な事実で

あった。歴史学において、史料に基づかない「思いこみ」ということは大変危険であるということを改めて思った次第である。

一方、盛岡藩領の田名部通においては、地域の有力な湊に船大工が居住し、とくに川内・大畑には相対的に船大工が多く、田名部通一帯の船大工ネットワーク(組)も形成されており、大型廻船である弁財船、中規模の近距離廻船である天当船などの発注にも対応できる体制があったという結果を導き出している。

このような点が知られてこなかったのは、テーマの選択もさることながら、地域に残されてきた地方史料の存在があまり知られておらず、充分に活用されてこなかったということも大きいだろう。石山氏がそのような史料を見出し分析した上で導き出した成果は、近世北奥地域の流通や産業の問題とも絡んで、重要な指摘をなしているといえる。

第Ⅱ部は、白石睦弥・土谷紘子・藤原義天恩・中川和明・葛谷大輔・坂本壽夫各氏の論文によってなる。

白石氏の論文「寛保津波の被害と北方諸藩の災害対応」は、北奥地域の災害史研究をテーマとする筆者の腕が十二分に生かされた論文であるといつてよい。東北地方をフィールドに持つ歴史研究者のなかには、あの三・一一に身をもって体験したできごとをきっかけに、被災地に入つて史料の保存活動に尽力したり、災害の被害を記した史料と正面から向き合うことで過去の災害史料から何かを学び取ろうと考えたりした人も多い。歴史研究においても、身近な問題として災害をとらえ、社会に与えた影響を明らかにし、過去からのメッセージを伝えていく、そのような姿勢を求める動きもある。

地震や津波、気象などの災害史料は、自然科学者たちに、過去に発生した自然現象の原因究明の手かりとして用いられてきたのだが、一方において、それらと同じ史料が、災害が社会に与えた影響という、歴史研究者が注目すべき問題点に最近になるまであまり用いられてこなかったといつてよい。その点、白石氏は、東日本大震災以前から前近代の災害史を研究対象とし、災害を語る史料から、その被害状況はもろろんのこと、災害の影響を受けた社会について考察していた、北東北における希有な研究者の一人といえるだろう。

白石氏は、寛保四年（一七四一）七月十九日に発生した「寛保津波」について、松前・弘前両藩の史料から、それぞれの地域における被害状況を明らかにするとともに、災害への対応の結果、松前藩では藩財政構造が大きな変化を見せ交易から運上金・役銭に基盤が切り替わっていった可能性を、弘前藩では凶作下の津波被害などにより治安悪化に代表される社会不安につながった可能性を指摘している。

東北地方の前近代に発生した災害研究といえば、これまでは天候不順などが原因となり、社会にも多大な影響をもたらした飢饉に目を向けることが専らだった。白石氏の研究は、史料の分析結果が「可能性」としての側面も多く、今後さらなる実証が必要なように思われるものの、飢饉以外の災害においてもそれまでの藩の形が変わり、大きな転換をもたらす契機となりうることを示してみせた研究であって、災害史の上だけではなく、筆者においても、幕藩制社会や近世の北奥地域社会というものもを考えるうえで新たな視点を提示された感がある。

土谷論文「文化・文政期の大葛金山と殖産興業―養蚕実施を中心にし

て―」は、文化・文政期の秋田藩で採られた殖産興業政策のうち、文政九年（一八二六）に全藩領に奨励されることになった養蚕と、同時期に大葛金山（現秋田県大館市大葛）において請負人荒谷忠兵衛家の取り組みによって実施された養蚕の関連性について指摘した論文である。

金山からの生産稼行の低下・飯米の価格高騰に悩んだ荒谷家では、山内の生活維持のため、短期間で利益が上がり、老人・女性でも可能な養蚕に目をつけ、生産を開始する。鉱山請負人が周辺村落にも影響を有していたため、鉱山周辺の地域にも養蚕が広がることを藩から期待された。一方、藩は藩財政の悪化を解消するため、養蚕を奨励する一方で、銅の増産を中心に鉱山業に注力するようになる。大葛においても銅の増産が養蚕の拡大と共に期待されるが、やがて山内の設備投資のために経営が行き詰まり、やがて養蚕事業の廃止が企てられるという展開を見せていくことを、土谷氏は述べていく。

恐らくは紙数の都合であろうか、養蚕が周辺地域に広がりを見せていく過程が今後の課題とされたり、また藩から強い期待を持たれていた大葛金山における養蚕が終焉に到る背景の説明が詳細に述べられていなかったりするのは大変残念である。が、前者の問題については今後考察が加えられる点として筆者も言及しており、鉱山と周辺地域のつながりについてさらに深化していくことが期待される研究である。

くしくもこの後、平田国学と北奥地域との関わりに言及した論考が三編つづく。藤原論文「平田門人と主体性の問題について―鶴舎有節と『かがなべ』日記を題材として―」は、津軽平田国学のリーダーの一人鶴舎有節（一八〇八―一八七二）の残した日記「かがなべ」を材料に、

津軽における平田国学のリーダーとしての有節の覚醒と国学普及への行動、有節自身の人物像を読み解こうとする試みである。日記の内容紹介と共に、津軽において平田国学が盛んになる時期と並行する形で進んだ幕末維新期の変動を日記がいかにかに記すかという点にも言及は及ぶ。

氏の論文を読む限り、平田国学の地域的展開を探るうえで、また、幕末維新期の弘前における定点記録として、「かがなべ」の価値は高そうである。所蔵先の目録に存在は明記されていても、われわれの注意を引くことなく、内容について知られて来なかった史料がいかにかに多いことだろうか。この論文を読んで改めてそのことを思わせられたことであつた。幕末維新期における弘前における学問研究、社会動向を研究する上で有用な史料の存在を明らかにした藤原氏の仕事は大いに評価されるべきであらう。

個人の備忘のために日記が日々書きつがれるものであることは明らかなことであるが、日記が残存する、読み継がれる可能性もあることも指摘しておくかなければならないだろう。膨大な内容を持つ「かがなべ」が有節の死後も残されてきたのには、平田国学の徒の記録としての側面がこの日記が持ち、さらに彼らや後進の者たちへの継承を意図したからとも考えられるのではないか。そのような意味において、今後の津軽における平田国学の検討において不可欠な史料がここに姿を現したことになる。

筆者の若干の後悔を述べさせてもらえれば、藤原氏による日記の内容に触れた部分を読みながら、もう少し早くこの豊かな内容をもつ日記の存在を知り得たなら、筆者が携わる『青森県史』資料編近世6・幕末維

新（今年度末刊行予定）においても記事の紹介が可能であつたかも知れないと、地団駄を踏む思いである。

中川論文「平田塾と地方国学の展開―盛岡藩を例に―」は、これまで余り知られず、研究の対象としても興味関心を引かなかつた盛岡藩の平田国学グループやその国学研究の一端について検討を加えたものである。中川氏は最近国立歴史民俗博物館所蔵となつた平田篤胤関係資料中から盛岡藩における平田門人の記録を抽出し、盛岡に残された史料も活用して検討を加えている。

盛岡藩における平田国学については、既に『青森県史』近世編・学芸関係（青森県、二〇〇四年）において、和賀郡土沢（現岩手県花巻市）出身の菊池正古が著した『論語考』・『皇祖宮所考』・『海賊防禦必勝録』を、また『皇祖宮所考』をめぐつて、その内容を平田門流の教えに背くとして津軽平田国学のリーダー鶴舎有節が論駁を加えた『皇祖宮所考弁』についても掲載し、その特徴ある言説が紹介された。盛岡平田国学のリーダーは、門人として平田塾塾長を務め、藩にあっては藩校「作人館」助教となつたその菊池正古自身であつたことを中川氏は指摘し、『皇祖宮所考』の刊行・流布・論争の経緯について触れる。さらに安政（元治年間に藩内から平田門人が増加してはいるが、その活動や役割は限られたものにとどまつたとする。盛岡藩の中に国学を研究する芽がなかつたとは思わないし、正古が教官にもなつたように藩校でも学べる素地はあつたわけだが、中川氏の指摘するように、確かに盛岡藩の幕末期、三閉伊一揆（嘉永六年、一八五三）勃発後の藩政改革や戊辰戦争時の動向には、あまり国学の影響が感じられないようにも思われる。従来の盛

岡藩の藩政史や藩社会の研究で平田国学について注目が向けられなかったのも、そのような政治・社会への影響力の弱さという視点が作用しているのではないか。そのような中で思想的な観点から、学問や著述について、またその内容の特異な点について光が当てられその影響面が考察されたことは意義深い。

この論文で貴重なのは、『皇祖宮所考』は孤本ではなく二種類の版が存在することを指摘し諸本の分析を行っている点と、同書を巡る流布の構造と平田門内での意見対立の存在を指摘していることである。地方の門人の著書が、全国門人に所蔵され、さらには批評・批判の対象になり得たと指摘したことは、平田国学の持つ学問的ネットワークの広がりを検討する上で、これからの展開を期待させるものである。

葛谷論文「維新时期における地方招魂事業の計画と展開―弘前藩の招魂事業―」は、明治二年（一八六九）の戊辰戦争終結後、弘前藩において実施された招魂事業について検討している。葛谷氏がまず注目したのは明治二年六月六日の招魂祭実施についての計画・執行にいたる体制で、祭事を中心とした小野正房（弘前八幡宮神主）・長利仲聴（弘前熊野宮宮司）が平田門人であることを指摘し、新政府の宗教政策において平田国学の影響が大きかったことがその背景にあるとする。さらに、明治三年五月以降建立が計画された招魂堂建立の動きの動向を整理している。そこで注目されるのは、藩の青森重視政策により、建立地が当初弘前一ヶ所だったものが、青森を本社とし、弘前にも堂を建立するという二社体制に変更された点であって、祭事政策が藩政動向にも大きく左右されるものであったとする。しかし、青森の開発奨励に力点の置かれた政策

下、人手不足の影響をもろに受けて、招魂社建立は進まないまま廃藩を迎えたという内容である。

戊辰戦争の戦死者を「新たな神々」として創造し祀っていく具体的な過程が、葛谷氏の詳細な検討によって、実に人為的、かつ政策的なものだったことが明らかにされたわけだが、人々がそれをどう迎えたのかという点については、近代に入ってから招魂事業の展開を考えることにつながっていくという意味においても、今後の検討がさらに必要な部分であるのか。たとえば招魂祭が数万人の群衆を集め活況を呈したという指摘がなされるが、押し寄せた群集心理について、人々はそれを祭事としてとらえていたのか、藩による大イベントの開催としか見ていなかったのか、またそこに藩権力による動員などといった介在はないのかといった観点からの検討はなされるべきだろう。

坂本論文「明治三・四年青森県南部地域の行政実態について―主に五戸通を中心として―」は、明治維新後、盛岡藩領から黒羽藩管轄を経て、斗南藩領と変遷した三戸郡五戸通・北郡の状況について、「差図帳」という史料に記された触書・願書などを分析することにより、支配体制の変容と地域社会の動向の関連について検討を加えた論文である。坂本氏の分析によれば、黒羽藩管理下から斗南藩先遣隊による施政がなされた明治四年（一八七一）初頭にかけては、脆弱な行政支配のもと、旧盛岡藩時代の社会体制を維持し混乱を避けようとしたようである。藩士移住後は開墾・養蚕などの産業が奨励されるなど積極策がとられたものの、成果を挙げる以前に廃藩を迎えたという。坂本氏の練達した史料分析により、あまり知られてこなかった斗南藩による領内支配の一端をより明確な姿

でとらえることが可能になったといえる。

会津から斗南に移住した藩士や家族の生活が窮乏を極めたことは、坂本氏も指摘するようによく知られたことだが、その窮乏の背景を知りうる一次史料がなかなか見出されなかったこともあって不明確な部分も多くあり、さらなる新史料の発掘が求められていたところである。「差図帳」や、今後『青森県史』資料編・幕末維新の編集過程で翻刻されることとなる斗南藩関係の史料なども含めて、維新後における地域社会の実像がより明確になるであろう。

III

以上、蕪雑ながら内容の紹介と、雑駁な読後感を書き連ねた。浅学な筆者故に、編者や執筆者各位の意図を汲み得なかつた部分もあるかも知れず、その点については寛恕を乞いたい。

各論文を通覧し共通点として指摘できるのは、地域に残された史料を掘り起こし、それを丹念に分析し成果につなげようという、実証的な研究姿勢が貫かれている点である。奇をてらわれない手法を採った結果、手堅く確実な成果に至っているように思われる。

この充実した論集で取り上げられているのは、政治史・社会史・産業史・思想史・災害史・幕末維新史と非常に多種多様な分野であって、この地域における近世史研究の幅の広さを示している。それは偏に、戦後新制大学として成立した弘前大学が、日本近世史の教官として宮崎道生・沼田哲・長谷川成一各氏らの優れた研究者を擁し、教え子たちの教育

に力を注いだことが大きいのだろう。弘前大学國史研究会の層の厚さに加え、本誌『弘前大学國史研究』というクオリティの高い研究誌という研鑽・発表の場が整えられ、積極的に参加を求められていることも要因に挙げられる。その結果、弘前藩の藩政史研究から始まっていった研究が、一藩に止まらず、周辺地域史や国家史をも見据えた北奥地域史という名に恥じない広がりを持つに至っている。本論集の内容の濃さはその一端を示すものといえる。

勿論、今後に残された課題も多い。それは個々の研究にとどまらず、今後の北奥地域史の展開にかかわる問題である。

書名にある「新地平」とは大変に意味深い言葉である。地平線は果てしないものようでもあり、限りあるもののものである。立脚した位置によって見方がいろいろに分かれてくるためである。

筆者が抱く一抹の不安として一笑に付されればよいのだが、北奥地域史の牽引役・育成者・オーガナイザーとして存在の大きかつた長谷川氏が弘前大学を退官されたことで、これまで弘前大学の教員・大学院生・学生・出身者たちを中心に展開されてきた北奥地域の近世史研究は一つの画期を迎えたといつてよいだろう。これまで維持されてきた地域史研究は本当に根を張っているものなのか、これから先も研究の意欲を持つた後進たちが現れてくるのかという問題である。もしこれを契機に我々の研究が立ち止まるのであれば、この書が北奥地域史・近世史の地平線として行きつくところとなつてしまふだろう。一方、我々が更に研究を進展させることによつて、「新地平」は今後の研究の足掛かり、一時的な地平に止まり、さらに新たな地平が見出されていく。

あとがきにおいて本田氏も指摘しているが、この論文集が以前の『津軽藩の基礎的研究』（長谷川成一編、国書刊行会、一九八四年）・『北奥地域史の研究』（同編、名著出版、一九八八年）といった、現在国家史・藩政史・地域史研究における道標の後に引き続きことになるものかどうか、偏にそれはこの論文集をうけたわれわれ研究者による今後の取り組みにかかってくるものである。編者におかれても、当然のことながら、寧ろ後者、さらなる進展を願う第一歩として、この書名を選ばれたのであろうし、新たに就任した弘前市立博物館館長という研究拠点の場を得て、さらなる地平を目指そうと歩き出しているといったところではないだろうか。

そのように編者の考えを勝手に付度してしまうと、この地域の歴史的対象を研究の対象とする我々にとっても、またこの論文集において取り上げられたテーマに関連する研究を進めている研究者にとっても、編者から科せられた課題は重く、また深いものがあるといつてよい。この書に引き続き北奥地域の近世史研究が、さらに進められていかなければならないのである。

（二〇一四年三月刊、岩田書院、A5判、本文三四八頁、

本体価格七九〇〇円＋税）

（ちば・いちだい 青山学院大学・聖心女子大学非常勤講師）